

# B i b l i a



もくじ

私のオペラ体験記  
藤原先生のポーランド  
での楽しい体験談 2

新着図書紹介 2

ごぞんじですか？  
カトリック大学図書  
館横断検索 3

教職員の著作紹介  
保多先生のCDはも  
うお聞きになりましたか？ 4

「くぬぎ」コー  
卒業生の作品をご紹  
介します 5

図書館員からの  
メッセージ⑤ 6

お知らせ

## マザーグースの中のクリスマス

英米文化学科 田中 妙子

クリスマスはマザーグースの中でも様々な形で登場する。クリスマスプディング、クリスマスパイ等、食べ物もいろいろあるが、クリスマスの唄といえばやはり『クリスマスの12日』が先ず思い浮かぶであろう。これは、積み重ね唄になっていて、恋人のあの人がクリスマスの1日目から、東方の三人の博士たちが贈り物をしに来た顕現節(1月6日)の12日目まで毎日プレゼントをくれるという唄である。フランス起源といわれるこの唄は、当然カトリック的なメタファーが含まれている。

プレゼントは日に日に増えてゆく。リーダーが唄った後をこどもたちが真似て唄うのだが、間違えたこどもたちは罰としてかえるの真似とかをしなければならぬ(a memory-and-forfeit game)。

唄は次のように始まる。→

最終スタンザの大意は次のとおりである。「クリスマスの12日目、恋人のあのひとは私に12人のドラムをたたいているドラマーと、11人の笛を吹いている笛吹きと、10人の飛び跳ねている紳士たち、9人の踊っている淑女たち、8人のミルクを絞っている女中たち、7羽の泳いでいる白鳥、6羽の卵を産んでいるガチョウ、5つの金の指輪、4羽のさえずる鳥、3羽のフランスの雌鳥、2羽のキジバト、梨の木に止まった1羽のヤマウズラをくれた。」

なんという大層なプレゼントであろう。もともと、「梨の木に止まった1羽のヤマウズラ」とは、磔にされたキリストのことで、「2羽のキジバト」とは、新約、旧約の聖書のことであり、本来すべてがキリスト教的な隠れた意味を持っていたと思われるが、現在は明確にはわかっていない。アメリカのPCN銀行がこの唄のプレゼントの表す価値の総額をドルで1984年以来、毎年計算している。2001年のこの総計は時価、\$62935.17になっており、前年比で4.36パーセントの上昇となっている。

唄自体に話をもとせば、娯楽の少なかった過去の時代には、暖炉のそばで、大人も子供もクリスマスの時期にはこうしたあそびを無邪気に楽しんだのではないかと想像される。この唄の初出は *Mirth without Mischief* (c.1780) である。

付け足して述べさせていただけるなら、シェークスピアのお芝居にもなった12夜は、この顕現節の前夜祭のお祭りであり、クリスマスは12日続くので、顕現節より前にツリーを片付けると不吉なことが起こるとの迷信もあるのでご注意ください。

On the first day of Christmas, my true love sent to me  
A partridge in a pear tree.

On the second day of Christmas, my true love sent to me  
Two turtle doves  
and a partridge in a pear tree.

.....

On the twelfth day of Christmas, my true love gave to me  
Twelve drummers drumming,  
eleven pipers piping, ten lords a-leaping,  
nine ladies dancing, eight maids a-milking,  
seven swans a-swimming, six geese a-laying,  
Five golden rings,  
Four calling birds,  
three French hens,  
two turtle doves  
And a partridge in a pear tree.

# 私のオペラ体験記

藤原先生のCDをお聞きになりませんか？

☆スペイン、イタリア、シチリアの旅  
☆グラナダ：スペイン、イタリア、シチリアの旅Ⅱ

オペラに出演するようになって間もない頃、ポーランドのオペラの日本初演に抜擢された。モニューシコの「ストラシニ・ドヴール」というオペラだがポーランドを代表する国民に愛されている作品である。私の役は貴族の青年（祖国ではいつも戦いがあるので、いつでも戦場に向かえるよう独身主義を貫いている）。その彼が若い娘に恋をし結ばれるという、非常に民族的で興味深い作品である。その中には「オルゴールのアリア」と名付けられたステファン（私の役）の名アリアがある。公演終了後ポーランドの指揮者と演出家から「ワルシャワで歌わないか」ということでポーランドに行くことになる。私自身ポーランドと言うとシヨパンの国、社会主義の国ぐらいの認識しかなかった。ポーランドではいろいろなステージを用意してくれた。一ヵ月半の間にオペラ出演、リサイタル、コンサート等移動日を除いてはほとんど空いている日はない。日本でも

いくつかのオペラやコンサートに出演していたが、その頃の私の演奏経験としては大変ハードなものだった。大使館の文化担当官より、ポーランドでは「英語を話せる人が多いし通訳もいる。」との事でとりあえずジンドブレ（こんにちは）、ジングエバルヅ（どうもありがとう）、ターク（YES）、だけ覚えて出発。到着してマネージャーから「ワルシャワ大劇場に出演おめでとう、その前に地方の劇場で歌ってからのの方が良い。」とのメッセージを受け、まず最初はバルト海歌劇場（グダニスク《第二次世界大戦が勃発したところ、教会や広場すべてが赤レンガで覆われた古びているが感動的な都市》）・・・私が赤レンガに魅力を感じるのここから来ているのかもしれない。・・・さて舞台上で私は日本語で歌い、周りの出演者はポーランド語で歌うというものだった。オペラは音楽によって劇が進行するので言葉は違っていてもスムーズに

## 新 着 図 書 紹 介

- ★あるクリスマス トルマン・カッティ著 文藝春秋
- ★異文化コミュニケーションの理論 石井敏ほか編著 有斐閣
- ★風の名前 高橋順子文・佐藤秀明写真 小学館
- ★子ども白書2002 日本子どもを守る会編 草土文化
- ★子どもはどのように絵本を読むのか 柏書房
- ★この世で一番のメッセージ オウ・マンディノ著 竹書房
- ★コミュニケーション学入門 植村勝彦ほか著 ナカニシ
- ★世界のお酒とおもしろ文化 D.Bヒューズ著 たる出版
- ★日本語ディハートの技法 松本茂著 七賢出版
- ★人間とコミュニケーション 原岡一馬編 ナカニシ
- ★Noam Chomsky ノーム・チョムスキー著 リトル・モア
- ★キリスト教年鑑 2003 キリスト新聞社
- ★おりがみでクリスマス 日本折紙協会
- ★クリスマスのぶたぶた 矢崎存美著 徳間書店
- ★クリスマスをさがして T.S.ハイマン作・絵 金の星社
- ★クリスマスはスゴイ！！ クレヨンハウス
- ★サンタクロースの忘れもの L.ムーア著 新潮社
- ★聖書物語 F.ホフマン絵 日本基督教団出版局
- ★てんしさまがおりてくる 五味太郎著 フロンツ新社

## ● 芸術文化学科 藤原 章雄

運んだ。少々自慢話になりますが、終わった時の大拍手とブラボー。サインの列。私にとって海外での初めてのオペラ公演は感動的であった。長蛇のサインの列、「移動があるので早く」と促され途中で切り上げたが、日本ではなかった事、どうもこの列は漢字のサインに興味を持った人達だと気が付く。..まあ、どちらでも良い感激してくれたのだから。なんとその慣れていない下手なサインが翌日の新聞に《日本からきたサムライテノール藤原章雄》と、載ったのです。お恥ずかしい。次はクラコフ（むかしの首都、非常にきれいな町）予算の関係が通訳はいなかった。片言の英語、イタリア語とパントマイムで日程をこなす。音楽は世界共通語で心は通じ合えると手ごたえを感じる。いよいよワルシャワ大劇場（テアトロ ヴェルキ）へ。ポーランドも日本も戦争で辛い体験をしたことが共通のせいかな？非常に親日的だった。戦後、国を復興するにあたり、瓦礫

と化した首都ワルシャワに「国民よレンガーつを持って集まれ！」の呼びかけで作られた広場、また何よりも感動的なのは、戦後食べる物さえ無いときに「国民にとって、時には腹を満たす事より芸術は必要である」と、このワルシャワ大劇場を再建させた事である。さすが音楽の国。

メーキャップから本番までテレビカメラが入るといつてないプレッシャー。フィナーレではマズール（マズルカの原型）を皆で踊った。そして大成功。（またしても自慢話）オペラの後にはシヨバン協会のリサイタルがあった。リサイタルの伴奏合わせ時にピアニストが「私の家の前を今のローマ法王が法王になられたお祝いのパレードで通ったのよ。」と誇らしげに語っていた。この時期はワレサ氏が台頭し始め、ポーランドが救世主を待ち望んでいた時期であった。この後に続くおかしな、楽しい、太陽の国イタリア留学のお話は、またの機会に。

### ポーランド探訪

- **もっと知りたいポーランド** 弘文堂 (302.3)
- **音楽と美術の旅** チェコ・スロヴァキア・ハンガリー・ポーランド 音楽の友社 (293.4)
- **ポーランドの民話** 恒文社 (388.3)
- **ポーランド音楽史** 雄山閣 (762.34)
- **エクスプレスポーランド語** 白水社 (889)
- **101のマドンナ** ポーランド・イコン巡礼 (o702.099)

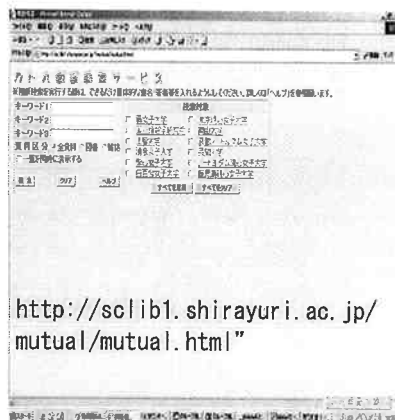
## ご利用ください カトリック大学図書館横断検索

日本カトリック大学連盟に加盟している図書館11館の蔵書が一度に検索できるシステムがあります。

カトリック大学連盟の図書館は皆さんの学生証を提示すれば、利用することができますので大変便利です。お探しの本がこの図書館にない場合、この検索システムを使ってください。

都内のカトリック大学図書館は、上智大学・聖心女子大学・清泉女子大学・白百合女子大学の4校です。

ご利用の際は右記のURLから、または白百合女子大学図書館のホームページからアクセスしてみてください。



武満徹は現代日本を代表する、国際的にももっとも有名な作曲家のひとりですが、多くの映画音楽を書いたことでも知られています。“SONGS”は、長年にわたって、映画を始め、演劇、ドラマなどの様々なシーンのために書きためられたメロディー集で、のちに作曲家自身の手によって、合唱曲として編曲されたものも数多くあります。作詞は武満と同時代を生きた詩人、脚本家、バレダンサー、評論家、文学者、小説家、シンガーソングライターら多彩な人物たちで、他分野の芸術家との協働によって武満は「精神を固く閉ざされたものにせず、自由にはばたかせるためのパスポートとしたい」と願ったといえます。“ノヴェンバー・ステップス”に代表されるオーケストラ曲や器楽曲よりも、ポップでカジュアルな雰囲気をもったこれらの歌に、私はとても魅力を感じていました。

ちょうど、ギタリストの鈴木大介さんと組んでスペイン歌曲を盛んに演奏していた頃のこと、あるテレビ

番組で、鈴木さんは晩年の武満にその演奏を絶賛されたことでプロになる決心をしたこと、そして武満作品には熱い思い入れのあることを知りました。それからコンサートのアncore・ピースに「小さな空」や「うたうだけ」や「翼」などを取り上げ、武満“SONGS”をプログラムに何回かのライブステージも重ねて、CDの制作に道筋がついたのでした。

これらの歌は旋律にだけ武満の著作権が生じ、伴奏部分は演奏者の自由に任されているという点で、伴奏者には編曲と即興の手腕が要求されます。ギタリスト鈴木大介さんとピアニスト寺嶋陸也さん、この二人の若い音楽家とのセッションが、私にとってどれほど画期的で刺激的なものであったか、このCDにはその心踊る体験から生まれた音が残されています。

.....  
同 窓 会 「 く ん ぎ 」 コ ー ナ ー

<卒業生の作品>

——図書館でご覧になれます——

- 短大美術科 23回生 荒巻信子さん(著・挿画)  
「句集 花あはせ」(東京四季出版)
- 短大美術科 9回生 葉月きららさん(清水恵子)(作・絵)  
絵本 「ぶれぜんとあったよ!」「ガルーからのおくりもの」(サンパウロ)
- 短大美術科 19回生 岡田愛理さん(図案、表紙デザイン、カット等)  
「手づくり派のための手芸図案 4」「すぐ使える刺しゅうモチーフ集2,4,6」  
「小さな可愛い刺しゅう」(いずれも啓佑社)  
「子どものための四手連弾曲集 いっしょにあそぼ 1~3」(ビクター音楽出版)
- 短大美術科 15回生 菊地由紀子さん(挿画)、23回生 鈴木未都さん(装丁)  
「冷たい季節」(瀬川恭子著、新風社)
- 短大音楽科 11~12回生 鎌田由喜子さん、前野このみさん、加藤史子さん、  
牧野真規子さん、松元邦子さんらによる演奏  
CD「二人のピアノ—内田勝人連弾曲集」

## 同窓会「くぬぎ」コーナー

佐野華子

短大美術科26回生（日本画）

## 「リサイクル工作と手芸1-4巻」

## 学 研

1~4巻中、20頁ほど企画制作と作り方の図を担当しました。ロケに同行して実際の子どもの反応が見られたことが楽しかったです。

使っている材料が人工物ばかりなので、初めてパソコンで描きました。CGは何度も同じ物を描かずに済み、修正するのに便利ですが、自己流でやると入稿時のトラブルが多いです。やはり、学生の間に通じ学ぶことをおすすめします。ただし、パソコンでもデッサン力は必要なので、手と目は訓練した方がいいと思います。

私は、日本画の学生でパソコンに触ったことがなかったため、ある編集者の方に「あなたの世代が感動した挿絵画家の列の後ろについても順番は回ってこない。CGの列に並びなさい」と言われた時はショックでした。今は、親でなく、子どもがお金を持つ時代だそうです。「ハチ子前後の女の子が描いたCG画が子ども達に人気なので、絵はいりません。ただ、若い子は企画ができないのです」と言われ、企画だけ担当する本もあります。けれども、現在やっているのは自然物の工作本で、ドングリや葉っぱの風合いを出すため、手で描いています。時と場合にに応じて、色々な表現をしていながら、少しずつ自分のスタイルが出来ていくのでしょうか。

## 「逆さっ穂をさがせ」 丸田かね子作 郷土出版

児童書の挿絵です。お話の舞台の川中島に取材に行って描きました。「逆さっ穂」というのが何なのか、ぜひ読んでみて下さい。作者の思い入れが深く、細かい指示を受けて何度か描き直しをしました。ただ、校正の段階でデザイナーさんが変更やカットをしていくので、描いたものとは違ってしまふことがあります。本は、一点しかない芸術作品と違い、複数の人の手に渡るものです。客観的になるためにも編集者やデザイナーさんとの協同作業で作ります。納得できないこともありますが、お互いの気持ちが同じになった時はとても嬉しいです。今後は絵本など、ある程度自分で全体の演出が出来るものにも挑戦していきたいです。

最後に、先輩から言われたアドバイスをひとつ。これは当たり前なことなのですが、「期日を守り、期待される以上の仕事を心がけ、誠実にとりくむこと」そうすれば、道おのずからひらくのだそうです。また、私自身実行できていませんが、自分の作品ファイルや、ホームページを持つことも、役立つことだと思います。

図書館では同窓生の方々の本やCDを集めて「くぬぎ」コーナーを作りました。

卒業生たちの活躍ぶりをどうぞご覧ください。

## シリーズ：図書館員からのメッセージ 第5回

## 安らぎの空間としての図書館 玉川上水をウォーキングしながら

図書館 原幸子

私は週に一度ですが、健康のために朝食後近くの玉川上水をひとりで歩きます。持ち物は携帯電話、ペットボトル、飴等です。私のこの姿を見て人生のパートナーはニコニコしながら「嬉しそうだね！」と声をかけてくれます。その言葉に後押しされるかのように私は出て行きます。歩き始めて3年目になりますが、ルートは変わりません。週に一度のこの時間は私にとって安らぎのひと時です。

四季折々の木々の移り変わりを眺めていると、心はウキウキしてきます。桜が咲き、エゴノキの白い小さな花が咲き終わると、玉川上水の木々は繁り、新緑の萌黄色から緑へと変わっていきます。木々は夏は日陰を作り、ウォーキングの私を夏の暑さから守ってくれます。栗の木の実が落ちる頃にはクヌギ、クマシデ、コナラ等の葉が色づき始め、ニシキギやモミジは光を浴びて真紅に輝きます。葉が落ち、裸木になった枝ぶりを眺めながら歩いていると、肩の力を抜き一杯光を浴びながら芽吹きを待っている木々は、まるで私のように思えてきます。この四季の移ろいの中で、私はいつの間にか自然と同化し対話しています。歩きながら思索に耽ったイマルヌエル・カント(1724-1804ドイツ観念論の創始者)になった気分です。カントは決まった時間に決まったコースを散歩するのが日課でした。そのコースは「哲学者の小道」と名づけられていました。

私がこのような気分を味わったことがあるのは、高校や大学時代の図書館です。図書館にある本は私を知の世界へと導き、何冊かの本を手にしパラパラめくっ

ていると時間が経つのも忘れてしまいます。現在の私が在るのもあの大学時代のゆったりとした時の流れが育ててくれたように感じます。自己実現には自分を見つめる時間がどれだけ備わっているかが大切です。自分と対話(カントさんのような気分)する時間、それが学生時代は本や図書館であり、現在は玉川上水のウォーキングです。私は「ひとりが好き」、でも変わった人間ではありません。ひとりになること＝「静けさ」は日常生活の中に存在する私に、時間に追われる毎日の中で自分を取り戻し、新たな力を生み出すために必要な時間であり友だちです。日々の疲れを修復し、内面のバランスをとるために、ひとりになる時間、空間を心から欲しているのです。

このようなことを考えているのは私だけではありません。純心図書館の返却本の中から『もう「ひとり」は怖くないー心地いい“孤独時間”の楽しみ方ー』(津田和壽澄著 祥伝社)という本を偶然手にした時、嬉しくなりました。この本は、創造の源としての「孤独＝ひとりであること」が明るい側面から語られています。本は、心のビタミン剤であり、疲れた心を癒し、豊かにしてくれます。図書館は安らぎの空間としてひとり静かに向き合うこともできます。それぞれの人がそれぞれの楽しみ方ができる場所、純心の図書館がそのような場になればと願いながら図書館の仕事をしている今日この頃です。

## お知らせ

## ★冬休みの特別貸し出し

期間：12月9日(月)～21日(土)

ひとり10冊まで

## ★冬休み中の開館日程

期間：12月26日(木)～27日(金)

1月6日(月)～7日(火)

時間：8：30～17：00

図書館はいつもあなたとともに



東京純心女子大学図書館報

びぶりあ N. S. 12 発行：2002. 12. 10

〒192-0011 八王子市滝山町2-600

電話0426-92-0326

E-mail ulibrary@t-junshin.ac.jp

Http://www.t-junshin.ac.jp/univ/lib/